

達成動機づけにおける「個人」と「社会」の調整と統合

—アスリートのボランティア事例に基づいて—

伊 藤 忠 弘

自己と他者、個人と社会の関係づけ

本節では、自己と他者、あるいは個人と社会の二項対立的な枠組みによって人間行動の理解を目指す研究をレビューし、そのなかに達成動機づけ研究を位置づける。

文化差と個人差の観点

自己と他者、あるいは個人と社会を二項対立的に位置づけることによって人間の行動を理解するという枠組みは心理学において広く認められる。例えば比較文化研究において、個人の目標を集団の目標よりも優先する「個人主義」の文化と集団の目標を個人の目標よりも優先させる「集団主義」の文化が対比させられてきた。Hofstede は、世界数十カ国の IBM 社員を対象とした調査に基づいて5つの価値次元を抽出し、その1つを「個人主義—集団主義」と位置づけた。この際、アメリカを筆頭にオーストラリア、イギリスなど西欧諸国が個人主義の得点が高く、グアテマラ、エクアドルといった中南米諸国やパキスタン、インドといったアジア諸国が集団主義の得点が高かった。この研究では日本は50か国3地域中22番目に個人主義傾向が高いという結果が得られているが、一般的には欧米—個人

主義、アジア—集団主義という枠組みの中で、日本人の集団主義的特徴がクローズアップされることが多い。ただしこの日本人が集団主義的であるという通説に対する疑問も提起されている（高野・櫻坂，1997）。

また近年の文化心理学では、異なる文化における認知、感情、動機づけ、さらにはそれに基づく行動の差異をそれぞれの文化の構成員たる個人が保持している文化的自己観の差異として説明する。文化的自己観とは、文化的慣習や価値観によってつくられた自己や人一般についての理解のモデルと考えられる。その典型的な例として頻繁に取り上げられてきたのが、北アメリカや西ヨーロッパに優勢な「相互独立的自己観」とアジアや南アメリカに優勢な「相互協調的自己観」の対比である（Markus & Kitayama, 1991）。相互独立的自己観では、人を他者や周囲から独立している能力や性格によって構成されるものとし、個人の行動はこの能力や性格の表出と考える。一方、相互協調的自己観では、人を周囲の状況やそのなかでの他者と密接に結びついた存在とし、他者との関係性のなかに立ち現れる様々な属性をそれぞれ含み込むものとする。

このような文化的比較で用いられる概念は、個人差を扱うための概念としてそのまま利用されることが多い。日本においても、個人レベルでの個人主義—集団主義傾向を測定する尺度（Yamaguchi, 1994）や相互独立的自己—相互協調的自己理解（木内，1995）を測定する尺度が作成されている。上記の尺度はそれぞれ2つの概念を対置して、一次的に測定している。これに対して、高田・大本・清家（1996）は相互独立性と相互協調性を独立した特性と捉え、それぞれ測定する尺度（実際には相互独立性の下位尺度として「個の認識・主張」と「独断性」、相互協調性の下位尺度として「他者への親和・順応」と「評価懸念」）を作成している。この背景には、一人の個人の中に2つの傾向がそれぞれ独立に存在するという考え方がある（木内，1995；高田，1999）。ただし相互独立性と相互協調性の両方の得点が高いこと、あるいは両方とも低いことを、概念的にどのように解釈し、説明するかという点については十分に議論されているとは言い

難い。

発達過程における統合と葛藤

これに対して、自己と他者、あるいは個人と社会の関係性が「対立」から「統合」へと変化していくことを仮定するモデル化もなされてきた（伊藤, 1998）。例えば伊藤（1993）は、独自の個性を受容し尊重しながら主体的に自分自身を活かしていく過程としての「個人化」と、他者との関わりの中でその社会の成員としてふさわしい態度を獲得していく過程としての「社会化」の2つのプロセスが、ときに対立し、ときに葛藤を生じさせながら、お互いに連関を持ちながら統合的な方向へと変化していくという人間の発達のモデルを提案している。そこでは、一人の個人の中に存在する「個人志向性」と「社会志向性」がそれぞれ独立に、しかしお互いに影響を及ぼしながら発達とともに展開していくことが仮定されている。伊藤（1993）は、「個人志向性」と「社会志向性」をそれぞれ測定する尺度を開発しているが、その相関は .257 から .610 と正の相関が認められ、特に 30 代や 40 代へと発達するにつれて相関が大きくなっている。

同様に、山本（1989）は「愛着と共感性の発達に基礎づけられ、他者の欲求・願望を感じ、その満足を目指す反動的行動（思いやり、世話）として現れ、自己と他者とはお互いの具体的な関係の中に埋没し拘束され責任をおう存在として把握される」“connected-self”と、「分離一体化の発達に基礎づけられ、他者の反応や外的統制によらない、自律的行動（積極的自己実現、力の発揮）として現れ、他者は自己と同等のお互いに不可侵の権利を持った存在として、抽象的一般的に把握される”separated-self”という自己の二面性に基づくモデルを提案している。これは、人間の存在様式を愛着と分離の2つのモードから捉え、しかもこの両面が「究極的には統合に向かう」とする Gilligan の主張に基づいている。しかし山本（1989）は“connected-self”の記述に基づく C score と“separated-self”の記述に基づく S score は双方とも発達の得点が上昇していくこ

とを見出しているが、両者の相関は -0.256 から $.188$ の間であり、発達的にその相関が高くなるという結果は得られていない。

これに対して谷（1997）は、相互協調的自己観を前提とする日本において、青年期の同一性形成において「個」としての自己と「関係」のなかでの自己との間をめぐる葛藤が引き起こされ、それが対人恐怖の引き金になることを指摘している。日本人青年の同一性危機において、「現実の自分は『関係』の方に向いているが、理想としては『個』を志向している」という形の葛藤と、「現実には『個』の方向に向いているながらも、理想は『関係』の方に向いている」という形の葛藤が想定できるが、この2つの葛藤はいずれも「自己を他者から分離して捉えるか、あるいは、他者との関連において捉えるか、という対立的状況において現実の自分の在り方と理想の自分の在り方との差異」と定義できるとしている。そしてこのように理想と現実のずれとして測定された葛藤の個人差が対人恐怖心性と関連していることが示されている。

杉村（1998）も同様にアイデンティティ形成の過程を、「自己の視点に気づき、他者の視点を内在化すると同時に、そこで生じる両者の視点の食い違いを相互調整によって解決するプロセスである」と捉えている。この相互調整とは、例えば青年期前期に青年が両親のような重要な他者から内的に分離し始め、自分自身の興味と社会的な現実とを協応させながら、満足できる職業、イデオロギー、対人関係などを見いだしていき、その後再び重要な他者との間の距離を取り戻し、最終的には自己と他者との間のバランスの恒常性が確立される過程のように表現することができるとする。

平井（2000）は自己と他者の要求が葛藤する仮想のジレンマ場面（例えば、恋人との結婚を親から反対される）を使用し、自分だったらどうするかを推論させ、発話思考法によって収集したプロトコルに基づいて、“メンタル・ネゴシエーション”とも呼ぶべき自己と他者の要求を調整するプロセスを明らかにしようとしている。

達成動機づけにおける葛藤

このような自己と他者、あるいは個人と社会の葛藤をめぐる問題は、達成動機づけの研究領域でもたびたび取り上げられてきた。例えば達成動機と親和動機は H. A. Murray の社会的動機のリストのなかで取り上げられている。達成動機の定義としては「むずかしいことを成し遂げること」、「障害を克服し高い標準に達すること」、「自己を超克すること」、「他人と競争し他人をしのぐこと」、「才能をうまく使って自尊心を高めること」などが挙げられており、親和動機の定義としては「自分の味方になる人に近寄り、よろこんで協力したり、好意を交換すること」、「友と離れず忠実であること」などが挙げられている。（Murray, 1964；八木訳, 1966）この2つの動機は葛藤することが予想され、その典型的な例が女性において顕著に認められると考えられてきた「成功恐怖」である（堀野, 1995）。女性が高い達成を成し遂げ、社会的に高い地位を勝ち取ることが、社会がよしとする従来の女性性に基づく価値観と対立するために周囲から否定的に評価されるのではないかと考え、能力が十分に高く実際に成功しているにもかかわらず、アンビヴァレントな感情を感じ、成功を隠したり、あるいは積極的に成功を避けたりすると説明される。最近では性別を超えて一般的に認められる傾向として扱われている。

これに対して土井（1982）は、アメリカでは達成動機が非親和的と定義されるのに対して、日本で測定された両動機の間には正の相関があることを指摘し、これを自らのデータでも確認している。そして Murray の挙げた達成動機に対応すると考えられる「非親和的達成動機」の次元（第3次元）と日本で報告されるものに対応すると考えられる「親和的達成動機」の次元（第1次元）を抽出している。つまり親和動機に裏打ちされた達成動機づけ、あるいは親和動機と達成動機が統合されているような状況や個人が存在する可能性を示唆していると考えられる。なおこの正準相関分析では第2次元として、積極的に自己を主張し変化を求め権威を重視しないという高次の活動動機で、他者に対する配慮も社会的規範も尊重しない

という個人主義に基盤を置いた活動的価値も抽出している。

堀野（1987）は、社会的・文化的に価値があることを成し遂げようとする「社会的達成欲求」と、個人自らが置く積極的価値に基づいて達成を志向する「個人的達成欲求」の差異を強調し、尺度作成において異なる因子を構成することを明らかにしている（ただし因子間の相関は記述されていない）。「社会的達成欲求」の尺度には、「まわりの人々が賞賛してくれるようなすばらしいことをしたい」、「社会の高い地位をめざすことは非常に重要だと思う」、「技能や努力が必要であると一般的に考えられていることをしたい」、「私の人生の1つの目的は立派なことをなして家族に喜んでもらうことである」、「何か非常に社会的に有意義なことをしたい」、「ものごとは他の人よりじょうずにやりたい」といった項目が含まれている。このことは社会的・文化的に価値づけられる達成の中身が実際には多岐にわたることを反映している。すなわち、「他者からの承認」、「社会的地位の獲得」、「努力することそれ自体」、「家族に対する義務」、「社会的貢献」、「他者に対する優越」など様々なものを達成状況において社会や文化が価値づけていると考えることができる。

このような価値と、個人が内発的に動機づけられる「自分のやりたいこと」や「好きなこと」は必ずしも一致するとは限らないし、そこでの不一致の程度に応じて葛藤の大きさも異なると予想される。また堀野（1987）の「社会的達成欲求」に含まれる様々な社会的・文化的価値のあるものが内在化され、個人的価値として取り込まれた結果、他の社会的達成欲求との葛藤、あるいは個人に内在化された異なる達成欲求同士の葛藤が現れることも考えられる。例えば、企業に就職して高い給料や地位を求めようとする「社会的地位の獲得」と、実家に戻って家業を継いで親孝行をしたいと考える「家族に対する義務」が、就職を控えた学生にとって葛藤することは容易に予想される。

それではこのような達成状況における「葛藤」をどのように処理し、異なる動機の間での調整を図ることができるだろうか。ここで学業達成におい

て「努力を隠す」ことの意味を考えてみたい。周囲の友人たちにテスト前になっても「勉強していない」ことを告げるという行動は、主張的なセルフ・ハンディキャッピングとして説明されている。セルフ・ハンディキャッピングとは、達成課題を前に自ら妨害要因をあらかじめ作っておくことによって、たとえ悪い成績であってもその原因がハンディキャップ（ここでは勉強不足）に帰属されるため、自分の能力の低さが明らかになることを避けることができるという行動であり、その背後に自尊感情の維持・高揚の動機が存在が仮定されている。主張的なセルフ・ハンディキャッピングの場合、周囲の友人からの自分の能力評価を維持するためになされる印象操作方略とも考えられる（伊藤，1992）。

しかし動機として考えられるのはそればかりではない。「勉強していない」と告げることは、友人たちに対して自分が「勉強することをよしとする」大人の価値観に与していないことを示す行動と解釈することもできる。さらに「勉強していない」ことは、自分が勉強して良い成績をとることが友人の成績を下げることにつながりかねないような相対評価が顕著な学校生活において、友人との競争状況にコミットしていないことを示す行動と解釈することもできる。このように、友人たちの自分に対する評判を気にかけて仲間から受容されたいという「承認欲求」や、現在の良好な友人関係を維持したいという「関係性の維持」もまたセルフ・ハンディキャッピングの採用を促進していると考えられる。

ただし実際に勉強していなければ、自分が望むような進学や就職といった現実の達成を成し遂げることができなくなる。そこで勉強していることを周囲に悟られないよう、隠れて勉強する必要が生じる（奈須，1995）。このように達成場面における自分の中の様々な欲求、そして重要な他者（ここでは友人であるが、それ以外に親や教師など）の要求に配慮しながら、それぞれを同時に満たすことができるような適切な方法を、個個人が発見あるいは工夫して獲得してくると考えられる。

スポーツにおける達成と社会貢献

本節では、個人的な達成と社会貢献の「統合」という観点から、プロスポーツ選手のボランティア活動を理解する枠組みを提示する。

プロ選手の成績に応じた社会貢献活動

スポーツ選手が様々なボランティアを行っているというニュースを聞くことは最近ではそれほど珍しいものではなくなっている。特にシーズン・オフには「社会貢献活動」の一貫として、プロあるいは一流のスポーツ選手がスポーツ少年団や地域のスポーツチームの指導を行ったり、サイン会やオークションにおいてチャリティーを行って、そこで集まったお金を寄付をしたり、あるいは地域の行事に参加したり、福祉施設を慰問したりといった活動が行われている。

アメリカの大リーグでは社会貢献において目覚ましい功績のあった選手を表彰するロベルト・クレメンテ賞が30年以上の歴史をもつが、日本でも1999年より同じように社会貢献活動に優れた実績をもつプロ野球選手に対してゴールデンスピリット賞が送られている。表1は第1回からの受賞者とその受賞理由である。このなかで注目されるのは、自分の成績に応じて寄付をしている選手の存在である。このような社会貢献のスタイルとして最もよく知られているのは、阪神タイガースの赤星選手であろう。赤星選手は自分の盗塁1つにつき車イスを1つ寄付するという活動を長年にわたって現在まで続けている。しかしこのような社会貢献のスタイルは、2000年のゴールデンスピリット賞受賞者片岡選手まで遡ることができる。片岡選手は安打1本につき1万円の寄付を行っている。最近では、和田選手が自分の投球数に応じて、岩隈選手が勝利数に応じて寄付を行っている。

プロ野球選手の多くがこのようなスタイルで社会貢献を行っているわけではないが、先に挙げた選手に限られるわけでもない。比較的最近に同様

表1 ゴールデンスピリット賞の受賞者と受賞理由

回	年	選手	チーム	理由
第1回	1999年	松井秀喜選手	読売ジャイアンツ	いじめ撲滅のキャンペーンとチャリティ活動
第2回	2000年	片岡篤史選手	日本ハムファイターズ	児童養護施設「愛隣会目黒若葉寮」への慰問と東京ドームへの招待；安打1本につき1万円の「片岡基金」を設立
第3回	2001年	中村紀洋選手	大阪近鉄バファローズ	大阪教育大学附属池田小学校の慰問；児童500人を試合に招待
第4回	2002年	飯田哲也選手	ヤクルトスワローズ	神宮球場に自費で少年野球選手を招待する「飯田シート」を設置
第5回	2003年	井上一樹選手	中日ドラゴンズ	「名古屋市立第一赤十字病院」小児科病棟の難病の少年少女への慰問活動
第6回	2004年	赤星憲広選手	阪神タイガース	自身の盗塁数に応じて全国の施設・病院に車椅子を寄付
第7回	2005年	ボビー・バレンタイン監督	千葉ロッテマリーンズ	新潟県中越地震やスマトラ沖地震などの復興支援チャリティーマッチを提案；ハリケーン・カトリナの被災地復興のための募金活動
第8回	2006年	和田毅選手	福岡ソフトバンクホークス	プレーオフを含む公式戦の投球数に応じてワクチンを寄贈
第9回	2007年	三浦大輔選手	横浜ベイスターズ	横浜市内の小学校での講演や社会福祉協議会にシーズンシートを寄付、障害者を自費で球場に招待
第10回	2008年	岩隈久志選手	東北楽天ゴールデンイーグルス	Kスタ宮城に養護施設の子どもたちを招待する「岩隈シート」を設置；2007年からは1勝につき10万円をボランティア団体に寄付、タイの図書館建設に貢献；宮城、スマトラの地震被災地の支援

の寄付を行っている（行っていた）選手や監督を表2に示す。投手では投球数、投球回数、奪三振数、勝利数、セーブ数に応じて、野手ではヒット数、ホームラン数、犠打数、盗塁数に応じて、寄付を行っている。ダルビ

表2 成績に応じて寄付を行っているプロ野球選手

所属チーム	選手	実施年	内容
読売ジャイアンツ	清水隆行	2004	ヒット1本につき1万円をアイメイト協会に寄付
福岡ソフトバンクホークス	新垣渚	2005	奪三振1個につき1万円を積み立て車いすを寄付
広島東洋カープ	黒田博樹	2005	奪三振1個につき1万円を積み立て社会事業団に寄付
福岡ソフトバンクホークス	杉内俊哉	2005	勝利数1つにつき10万円を積み立て車椅子を寄付
広島東洋カープ	グレッグ・ラロッカ	2005	本塁打1本につき1万円を日本ダウン症協会広島支部に寄付；打点1点につき5千円を野球ボールでリトルリーグ中国連名に寄付
阪神タイガース	岡田彰布監督	2006	1勝ごとに野生の虎を救う活動のためのパトロールキット（9000円）をインド政府に寄付
福岡ソフトバンクホークス	川崎宗則	2006	盗塁数に応じた車椅子の寄付；鹿児島県始良町社会福祉協議会と宮崎市を行う「宗基金」
日本ハムファイターズ	ダルビッシュ有	2007	1勝ごとに10万円を途上国の水不足解消に役立てる「ダルビッシュ有水基金」
		2008	1勝ごとに10万円を羽曳野市の「子ども福祉基金」に寄付
読売ジャイアンツ	阿部慎之助	2008	本塁打1本につき1万円を千葉・浦安市内の福祉施設に寄付する「阿部慎之助基金」
		2008	ヒット1本につき1万円を寄付する「阿部慎之助赤十字基金」
読売ジャイアンツ	上原浩治	2008	投球回数1回につき1万円を骨髄移植推進財団に寄付
日本ハムファイターズ	田中賢介	2008	1犠打ごとに野球用具を子供にプレゼント
オリックス	浜中治	2008	ヒット1本につき「新しい交通安全紙芝居」を1セットずつ保育園・幼稚園・小学校に寄贈
バッファローズ			
横浜ベイスターズ	村田修一	2008	本塁打で得られた打点に応じて「神奈川県立こども医療センター」に寄付（金額は非公開）

注) 所属チームは実施年のもの；実施年以降も継続して行われているものもある

ッシュ選手が自分の勝利数に応じて羽曳野市と水不足の途上国に対して寄付を行うことを表明したことはマスコミでも大きく取りあげられた。このような寄付行為の意味を考える上で注目すべきことは、寄付額の決定がシーズン終了後に語呂合わせ的になされたわけではなく、シーズン前に寄付額の設定が決められ、公表されていることである（公表しないで寄付を行っている選手がいるかもしれないが、残念ながらそれを知ることはできない）。このような社会貢献のスタイルをとる選手たちは、自分の成績が社会貢献にそのまま直結するような状況を自分で作り、その状況に身を置きながら本業である野球で優れたパフォーマンスを残したということになる。

このような社会貢献スタイルは野球選手にとどまらない。例えばプロゴルファーの上田桃子は、バーディー1つにつき本人と支援企業5社から3万円を抛出し盲導犬育成の支援にあてる「桃犬プロジェクト」を開始することが報じられた。またJRAの三浦皇成騎手は、騎乗数1鞍につきワクチン30本、勝利数1つにつきワクチン100本をNPO法人「世界の子どもにワクチンを 日本委員会」に寄付することをブログで報告している。

市民マラソンランナーの社会貢献

これまでの事例はすべて、その領域で活躍し一流の成績を残しているプロ選手によるものであった。しかし自分の成績に応じて社会貢献をするというスタイルは、ごく普通の一般アスリートにおいても見つけることができる。その1つが「チャリティー・ランニング」と言われるマラソン大会の形である。

市民マラソンの大会のなかにはチャリティーを目的の1つとして掲げるものが開催されている。そのいくつかは大会参加費の一部が様々な目的に向けた寄付として充てられるというものである。このような場合には、マラソン大会に参加、出場することそれ自体が寄付につながる。例えば、2009年で10回目を迎えた「谷川真理ハーフマラソン」はアジアやアフリカでの地雷の除去や廃絶の活動へのチャリティー大会として有名である。

また「リレー・マラソン」のようにある時間内で個人またはグループで走った距離を競う大会では、走行距離に応じて主催者側が寄付をすることを約束しているものがある。例えば、「24時間グリーンチャリティーリレーマラソン in 東京ゆめのしま」では会場での募金やチャリティオークションに加えて、周回コース（1.1 km）1周につき財団法人東京都公園協会へ1円ずつ寄付されることを謳っている。つまり時間内に走る距離を伸ばすほど寄付額もまた増えていく。これはプロ野球選手の自分の成績に応じて社会貢献をするという仕組みに近い。しかしもっともこのスタイルに近いマラソン大会はイギリスで行われている。

ロンドンマラソンでは、例えば動物のサイのハリボテをまとったランナーを多く見かけたりする。これは単に仮装して目立とうとしているわけではなく、また沿道の観客やテレビの視聴者に野生動物の保護を視覚的に訴えているだけでなく、レースを走ることによって実際にチャリティー団体にお金を寄付しているのだという。どのようにしてそんなことが可能なのだろうか。実はランナーは家族や友人、会社の同僚たちに、事前に自分があるチャリティーのために走ることを宣言し、確かに完走したらお金を寄付してもらうように約束しているのである。

このような仕組みが成立している背景にはイギリスの習慣がある。2008年北京オリンピックの女子マラソンで6位に入賞したマール・ヤマウチ選手は次のように語っている。「イギリスには、『私は〇〇を頑張りますから、その頑張りに対してご褒美をください』っていう面白い習慣があるんですね。で、そのご褒美は、自分のポケットには入れずに、チャリティーに寄付する。そういったベースがあるんです。」例えばある小学生が「運動会で100 m 走に出場するので、勝ったら1ポンドください」と近所をまわって署名を集め、その際「もらったお金はガン研究施設に寄付します」という使い道も明らかにする。実際に優勝したら集金して約束通り寄付をする。自らが設定した目標を達成することがそのままチャリティーとして社会貢献に直結するという仕組みである（ベースボールマガジン社、2009）。

成績に応じた社会貢献がアスリートにもたらす影響

このような社会貢献のスタイルは、アスリートにどのような意味を持つだろうか。選手のパフォーマンスを支えるものとなるのだろうか。

選手自身はその動機づけを高める機能を明確に述べている記事は少ないが、例えば上原選手の「自分にできることは、野球しかありませんので。シーズンの励みにして、少しでも多く投げられるように頑張ります」というコメントやゴルフの上田選手の「私ができることは一つでも多くパーティーをとること。それが盲導犬のPRにもなり、自分自身、米ツアーで戦う原動力になる」というコメントを見つけることはできる。イギリスにおけるランニングを通じたボランティアについても、マーラ・ヤマウチ選手が「一般の人は、仕事や子育てをしながら、フルマラソンの練習をするのは大変。でも、『チャリティーのため』という理由があるから、大きなモチベーションになる」と語っている。

従来行われてきたボランティア活動と比較してみると、まず寄付額が自分の成績に連動するため不安定であり、ケガやスランプなどで成績が上らなくなると、寄付ができなくなってしまう（もちろん、寄付してはいけないということにはならないが）。さらに寄付行為が事前に公にされ予告されるという点も異なる。日本ではこれまでこのようなボランティア活動は隠れて行うべきという風潮があり、自分がボランティアを行っていることを自ら公表することは売名行為と受け取られかねない危険性がある。しかもこのケースはすでに行った寄付行為ではなく、将来行うであろう寄付の予告である。それゆえに周囲からいっそう否定的に評価される可能性が高い。このようなデメリットにもかかわらず選手の一部にこのような社会貢献のスタイルが広まっていることを考えると、それなりの意味があると考えてしかるべきであろう。実際、ダルビッシュ選手は自分の活動が和田選手の活動により発想を得たことを認め、『『あれ、いいですね。よく考えましたね』と一目を置いた』と紹介されている。

仮にこれが選手の動機づけを高めたり維持する役割を果たしているならば、どのようなプロセスによるのだろうか。まず第一に、自分の行為、努力、成績に対する責任や義務の感覚が生じることによって、自分の遂行に対する「外的な統制」として機能することが挙げられる。自分だけの目標であれば、うまくいかないときに目標を変えて基準を下げるのが簡単できてしまうため、本来の目標に向けた動機づけを維持することは難しい。しかし自分の行為が他者（の幸福）に直接影響を与えるということになれば、目標を簡単に変えることはできないので困難な状況でも動機づけを維持しやすいという補完機能を果たすことが予想できる（伊藤，2004）。プロのスポーツ選手にとって自分の競技に対する動機づけはもともと自律的かつ内発的なものであり、外的な統制は必要としないはずである。しかし、プロであるが故に常に高いパフォーマンスが求められ、激しい練習が必要となる状況で、「外的な統制」を利用していることも考えられる。

第二に当該の社会貢献に関連する問題を多くのファンに知らせめたり、そのボランティア行動そのものを広めたりと周囲の人を巻き込んで、さらには自分の遂行に対するファンの期待や応援を呼び込むことによって、そのような期待や応援が自分の動機づけを高めるように働くことが予想される。

第三に自分の達成に対して、個人的な意味だけではなく社会的な意味を付与することによって、複数の目標を自分の遂行と結びつけ同時に達成できるような状況が構成されている。特定の遂行が複数の目的を持ち、複数の意味を持つのであれば、それを達成しようとする動機づけは高まることが予想される。

アンダーマイニング現象で明らかにされたように、本来自律的に行われてきた行為に対して物質的・金銭的な報酬を与えることは内発的動機づけを損なうため、外的統制はしばしば動機づけに対して否定的な影響を及ぼすことが指摘されている。しかし外的統制が動機づけを高める場合もある。例えば内発的動機づけの一連の研究の中には、外的報酬が逆に内発的な動

機づけを高めるエンハンシング現象が報告されている（宮本・奈須，1995）。

さらに他者からの期待や応援に応えようとしたり、与えられた職務や役割を全うしようとする動機づけが日本では優位であるという指摘もある（東，1996）。実際、大学生に対する調査ではこのような他者志向的な達成動機づけの重要性を指摘する者がいることが明らかにされている（伊藤，2004）。Iyengar & Lepper（1999）は、サンフランシスコのアジア系の小学校低学年生が、母親によって「やってほしい」と選択されたパズル課題に対して、自分の興味に従って選択したパズル課題以上に、内発的に動機づけられることを明らかにしている。このように達成行動において外的統制が必ずしも否定的な影響を及ぼすとは限らない。

ただし、先に述べたような社会貢献のスタイルが誰にでも等しく達成行動に促進的に働くというわけではないであろう。そもそもボランティアに対する関心が高くその動機づけも高い人でなければ、外的統制としては機能しない。また他者からの期待や責任感・義務感が課題達成に促進的に働きやすい人もいれば、むしろプレッシャーを感じさせるために課題達成に妨害的に働きやすい人もいるだろう。このため、このような社会貢献のスタイルは一部のスポーツ選手によってのみ採用されているのかもしれない。

「自分のため」と「周りの人のため」を統合することの意味

本節では、筆者の行った研究に基づいて、大学生における「自分のため」の達成と「周りの人のため」の達成の統合がどのように志向されているかを見ていく。

質問紙調査の自由記述の分析

達成動機づけにおいて、「自分のため」に、自分自身の目的や価値に従

って達成行動に従事することと、「周りの人のため」に、他者の要求や期待を満たすために達成行動に従事することは、一般には明確に区別される。自己決定理論の観点から考えれば、前者が自律的であり、自己決定性が高く、完全に内発的に動機づけられているのに対して、後者はそれに比べると自己決定性が低い状態であると言わざるを得ない。Higgins (1987) の制御焦点理論によれば、前者は自分がやりたいと思うから行動するのであって、こうなりたいという理想自己 (ideal-self) によって影響を受ける行動であり、促進焦点 (promotion focus) の状態と考えられる。これに対して、後者は相手の要求や期待を満たさなければならないという義務によって行動するのであって、こうならねばならないという義務自己 (ought-self) によって影響を受ける行動であり、予防焦点 (prevention focus) の状態とも考えられる。この制御焦点の違いによって、目標が達成されたり達成できなかつたりしたときの感情も異なると主張される。

伊藤 (2004) は大学生 222 名に対して、勉強やスポーツなど自分自身の達成行動について「自分のため」という動機を語る場合と「親のため」とか「ファンのため」といった「他者のため」という動機を語る場合を想定させ、考えるところを自由に記述するように求めた。そしてこの記述内容を KJ 法により分析し、大きく 5 つのカテゴリーに分類した。

まず「自分のため」と「他者のため」という動機をそれぞれ対立させて捉え、いずれか一方を肯定的、もしくは否定的に記述しているケースがある。「自分のため」に対する肯定的な記述（「他者のため」に対する否定的な記述を含む）が全体の 19.3%、「他者のため」に対する肯定的な記述（「自分のため」に対する否定的な記述を含む）が 10.2% を占めていた。最も多かったのは、3 つ目のカテゴリーに対応する、「自分のため」という動機を「他者のため」という動機の上に位置づける記述であり、全体の 44.8% と半数近くに及んでいた。この中には、自分を確立して初めて「他者のため」に行動することができるといった考え方や「他者のため」は「自分のため」に努力した結果として付随してくるものであるという考

え方、さらには「ファンのため」とか「応援してくれる人のため」と語るスポーツ選手も結局は「自分のため」に努力しているという考え方が含まれている。

残り2つのカテゴリーが本論文での「統合」に関する議論と関連している。4つ目のカテゴリーは「他者のため」に努力することの肯定的な側面と否定的な側面を意識しながらも、達成行動において「自分のため」と「他者のため」という動機双方の有効性を認める見方であり、全体の19.3%がこのカテゴリーに分類されている。この中には、人によってどちらの動機が有効であるかが異なるという考え方と共に、同じ一人の人の中にも双方の動機が存在し、それを適切に使い分けるとの必要性を主張したり、状況によっては一方をもう一方で補完するという考え方も認められた。この考え方の具体的な自由記述の例は以下のようなものである。

「多くの努力を必要とする場合、『人のため』だと考えて努力するには限界がある。その『人』が動機となるほどの存在でなければ、継続した努力をするのは無理だ。一方、『自分のため』だと考えるにも限界がある。目標はあくまで自分自身のなかにあるならば変更は可能であり、動機は弱まりやすい。このとき、他者のためにがんばるのであれば、目標は簡単に変えられないので、動機を補完することができるのではないか。」

「自分のためにがんばるということが、自己の進歩という点では望ましいように思える。しかし、自分のためにがんばるだけであれば、スランプに陥ったときに抜け出しづらいのも事実である。このようなときに、『人のため』といった外発的動機づけは大きな意味をもつと思う。片方のモチベーションが下がったとき、もう一方の方で補完するということが何をすることも効率がいいのではないかと思う。」

両者とも「自分のため」と考えて努力すると、自分の中の目標は自分で都合のいいように変えてしまったり、あきらめてしまったりするかもしれ

ないので、そのようなときに自分の努力が「人のため」にもなっていると考えることによって、目標を簡単には変えられないようにして、動機づけを維持するように補うことが指摘されている。

5つ目のカテゴリーは、「自分のため」と「他者のため」という2つの動機が互いに影響し合うという記述や両者が矛盾なく統合されている望ましい状態に対して言及するものが含まれており、全体の6.5%を占めていた。このような考え方の具体的な記述の例は以下のようなものである。

「両者を完全に対立したものとして捉えることは難しいのではないかと思います。自分のためにがんばることが結果的に周囲を喜ばせたり他人のためになることもあるし、他人のためにがんばることが自分に何もをも与えないということはないように思います。」

「スポーツ選手は、『他人のため』と『自分のため』を精神的に高い次元で、昇華し、実際には矛盾なく実践できているのではないだろうか。」

まとめると、達成行動に対する「自分のため」と「他者のため」という2つの動機の捉え方として、両者を対立させていずれか一方を優先するという考え方と両者を並置させる考え方がある。前者では圧倒的に「自分のため」を肯定的に捉える、あるいは「他者のため」を最終的に「自分のため」に還元して捉える考え方が多い。後者には、両者を区別して状況によって使い分けたり一方をもう一方で補完したりできるという考え方と、両者は密接に関連し相互に影響を及ぼし合っており、厳密に区別することができないという考え方が含まれる。

参考までに、上記の研究に基づいて作成した尺度項目（6件法；とても自分の考え方に近い（6）～全く自分の考え方に近くない（1）で回答）の中から、先の4つ目と5つ目のカテゴリーに対応する項目の平均値と標準偏差（大学生227名に実施）を表3に示す。両者を共に大切と捉えること、

表3 第4・5 カテゴリーに対応する項目の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
個人的には何のために努力するかはその時々 ¹ の動機づけによって使われている	4.27	1.31
モチベーションが下がったときに、「ファンのため」、「人のため」というのを支えにすることがある	4.02	1.26
自分の力だけで自分を奮起させてがんばることができない場合には、頑張る理由を他者に転嫁することで、目標達成のためのプレッシャーとして利用する場合がある	4.36	1.03
「自分のため」に頑張ることも、「他人のため」に頑張ることも、同等に大切なことである	4.52	1.30
人のためにがんばっても、いい結果が残ればそれは自分のものになるし、自分のためにがんばることでそれが人のためになることもある	4.76	1.05
「他人のため」は「他人が喜ぶと自分も嬉しいから頑張る」ということである	4.43	1.13

使い分けや補完、あるいは両者を統合的に捉える考え方は、平均値が可能なレンジの中央値（3.5）よりも高く、かなり受け入れられていると推察される。

面接調査による達成動機づけの現実と理想

さらに伊藤（2009）は大学生84名に半構造化面接を実施し、そのなかでこれまでの人生における努力（現在）と将来理想とする努力（将来）の仕方について、「自分のため」か「周りの人のため」かを、「両方」という回答も認めることを教示した上で尋ねた。その内容を14個のカテゴリーに分類し、さらにそこから4つの大カテゴリーを構成した。その結果は、表4の通りである。努力の理由として「自分のため」を挙げる者が現在、将来ともに多いが、現在の努力の理由として対象によって異なることや両方の重要性を指摘する者、あるいは「自分のため」と「周りの人のため」を統合的に語った者を合わせると、20%近くになった。

ここで注目したいのが、「自分ために努力することが周りに影響を与える」といった回答をした者であり、特に理想においてこのように述べた者

表4 努力の理由と理想のカテゴリーと人数

努力の理由	現在	理想
自分のため	34(42.0)	27(32.9)
自分のため（例：成長のため；将来のため）	26	19
自分の評価のため（周りに認められるため）	6	1
周りの人のための努力に対する否定的内容と自分のため	2	7
自分のためを優先	16(19.8)	34(41.5)
周りのための努力も結局は自分のため	3	4
自分の努力に周りの人が必要	2	5
自分のために努力することが周りに影響を与える	4	8
周りもあるが自分のため	6	6
自分と家族のため	1	11
周りの人ため	15(18.5)	8(9.8)
周りの人のため	10	3
人のために努力した結果、自分のために	5	5
両方	16(19.8)	13(15.9)
自分のため＝周りの人のため	3	5
時期による	3	0
対象による	5	2
両方	5	6

()は%

は8名(9.5%)に及んでいる。具体的には、「自分のための努力が周りの人のために喜ばれることだったら一番いい」や「自分のために努力して結果として周りの人を励ましたり勇気づけたりできることは自分もそれだけ頑張ったということになる」といった表現として現れている。この回答は、自分の好きなことややりたいことを職業として選択して努力するが、そのことを成し遂げることによって、何らかの形で周りの人のためになったり周りに影響を与えることを理想としていると解釈できる。事例としてすぐに思いつくのは、例えばスポーツ選手、ミュージシャン、芸能人などである。彼らは自分の好きなことを職業として、かつ多くのファンから応援され、その影響力も大きい。そのような意味で、「周りの人のため」に努力

しているとも言える。

この他に「自分の努力に周りの人が必要」といった回答をした者が理想において5名（6.0%）いた。この回答は「自分のため」に好きなことややりたいことを努力するにあたって、周りの人から期待されたり応援されたりすることが不可欠であると考えていると解釈できる。

上記と似ているが、逆に「周りの人のため」に努力することが結果的に自分のためにもなることを理想として挙げた者も5名（6.0%）いた。具体的には、「人のためにがんばれば自分になにか返ってくるとおもうので」や「周りのためになることをして、それが結局は自分のためになっている、それが自分の一番うれしいことになる」といった表現として現れている。

これらの結果は大学生のなかには理想の努力の有り様として、「自分のため」と「周りの人のため」のどちらかを犠牲にしてどちらかを優先させるというように対立させて捉えるのではなく、むしろ両者を接近させて同時に満たすことができるような状況を理想として考えている者が少なからず存在していることを明らかにしている。

結論

プロのアスリートが行っている自分の成績と寄付を結びつけるという社会貢献のスタイルは、「自分のため」の達成行動に「周りの人のため」という新しい理由や価値を付与することによって、動機づけを高く維持すると同時に、多くの場合対立しがちな2つの動機を調整し統合する方法と解釈できる。ボランティアの基本的な定義である「無償性」と「自発性」の観点から考えるなら、自分の成績に応じた寄付行為は厳密な意味ではこの基準を満たさないと指摘されるかもしれない。

しかし阪神淡路大震災のボランティアを対象にした研究では、活動開始時は「被災した人たちの生活の援助に役立とうと思った」という利他的動機が圧倒的に多かったが、活動を通して「最もうれしかったことや良かった

たこと」として「自分自身のべんきょうになった」や「新しい出会いや経験ができた」、「自分でも人の役に立てることがわかった」といった回答が多くを占めた。また活動開始時と継続過程で、利己的な動機から利他的な動機へ活動の理由が変化したり、その逆に変化したりする人がいたことも明らかにされている（佐々木，2003）。つまり現実のボランティア活動において、大学生の自由記述に現れていたように、「周りの人のため」に行うことが結果的に「自分のため」になっているとか、「自分のため」に行うことが「周りの人のため」に同時に役に立っていると参加者は意識しやすいと言える。実際のボランティアに参加している人にとっては、利己的動機と利他的動機は明確に区分できるものではなく、かなり接近していると考えらるべきであろう。

「自分のため」の達成と「周りの人のため」の達成の関係づけ方、すなわち調整や統合の仕方は、人によって異なると考えられる。両者を非常に接近させて、あるいは不可分に捉えている人もいれば、双方を対極に置いて対立させて捉えている人もいる。そしてこの関係づけの違いが、課題の選択や取り組み、努力の仕方や動機づけ、達成行動が本人にもたらす意味において差異をもたらすと予想される。しかしこの点はまだ明らかにされていない。

本論文では達成行動における葛藤を「自分のため」と「周りの人のため」に大まかに区分して説明したが、現実には葛藤する価値、動機、目的は多岐にわたるであろう。ある場合には2つ以上の価値、動機、目的が絡んで、それらを同時に満たすことを達成者が要求されることもあるかもしれない。現実の達成場面でどのような価値や動機が葛藤しうるのか、またそのような状況で達成を目指す人がどのような方法を用いて、調整や統合を図ろうとするのか、その事例を収集していくことも必要となるだろう。

また今回の枠組みにおいても、「自分のため」に努力することが結果的に「周りの人のため」になることを志向することと、「周りの人のため」に努力することが「自分のため」にもなることを志向することは、両者の

統合を図るという点では共通するものの、その内情は大きく異なっているように思われる。このような現象の差異を理解することも必要であろう。

引用文献

- 東洋（1994）. 日本人のしつけと教育 発達の日米比較にもとづいて 東京大学出版会
- ベースボールマガジン社（2009）. マラソンを通じたチャリティーの仕組み Courir 2009年4月号, 76-77.
- 土井聖陽（1982）. 達成動機の二次元説 —親和的達成動機と非親和的達成動機— 心理学研究, **52**, 344-350.
- Higgins, E. T. (1987) Self-discrepancy: A theory relating self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- 平井美佳（2000）. 問題解決場面における自己と他者の調整 教育心理学研究, **48**, 462-472.
- 堀野緑（1987）. 達成動機の構成因子の分析 —達成動機の概念の再検討— 教育心理学研究, **35**, 148-154.
- 堀野緑（1995）. 成功恐怖研究の再検討 心理学評論, **38**, 301-319.
- 伊藤美奈子（1993）. 個人志向性・社会志向性に関する発達的研究 教育心理学研究, **41**, 293-301.
- 伊藤美奈子（1998）. 人間の発達をとらえる際の2志向性概念の提唱 心理学評論, **41**, 15-29.
- 伊藤忠弘（1992）. セルフ・ハンディキャッピングの研究動向 東京大学教育学部紀要, **31**, 153-162.
- 伊藤忠弘（2004）. 達成行動における「他者志向的動機」の役割 帝京大学心理学紀要, **8**, 63-89.
- 伊藤忠弘（2009）. 重要な他者からの期待や葛藤経験と努力の理由づけとの関係 —他者志向的動機づけを規定する他者との関係性の検討— 日本社会心理学会第50回大会・日本グループダイナミクス学会第56回大会合同大会発表論文集, 62-65.
- Iyengar, S.S. & Lepper, M. (1999). Rethinking the value of choice: A cultural perspective on intrinsic motivation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **76**, 349-366.
- 木内亜紀（1995）. 独立・相互依存的自己理解尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, **66**, 100-106.
- 宮本美沙子・奈須正裕（1995）. 達成動機の理論と展開 続・達成動機の心理学

金子書房

Murray, E.J. (1964). *Motivation and emotion*. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice-Hall. (マレー, E.J. 八木冕 (訳) (1966). 動機と情緒 岩波書店)

奈須正裕 (1993). 声援なき教育のすすめ 一努力至上主義を問い直す— 若き認知心理学者の会 認知心理学者 教育を語る 北大路書房

佐々木正道 (2003). 大学生とボランティアに関する実証的研究 ミネルヴァ書房

杉村和美 (1998). 青年期におけるアイデンティティの形成：関係性の観点からのとらえ直し 青年心理学研究, 9, 45-55.

高田利武 (1999). 日本文化における相互独立性・相互協調性の発達過程 比較文化的・横断的資料による実証的検討 教育心理学研究, 47, 480-489.

高田利武・大本美千恵・清家美紀 (1996). 相互独立の一相互協調的自己観尺度 (改訂版)の作成 奈良大学紀要, 24, 157-173.

高野陽太郎・櫻坂英子 (1997). “日本人の集団主義”と“アメリカ人の個人主義” 一通説の再検討— 心理学研究, 68, 312-327,

谷冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖心性 教育心理学研究, 45, 254-262.

Yamaguchi, S. (1994) Collectivism among the Japanese: A perspective from the self. In U. Kim, H. C. Triandis, C. Kagiticibasi, S. C. Choi & G. Yoom (Eds.), *Individualism and collectivism: Theory, method, and applications*. Thousand Oaks, CA: Sage. Pp. 175-188.

山本里花 (1989). 「自己」の二面性に関する一研究 —青年期から成人期にかけての発達傾向と性差の検討— 教育心理学研究, 37, 302-311.

参照サイト

<http://ameblo.jp/miura-kousei/entry-10238985507.html>

<http://hochi.yomiuri.co.jp/contents/event/spirit/index.html>

<http://news.jprpet.com/news-bin/Detail.cgi?rgst=00002288>

<http://osaka.nikkansports.com/baseball/professional/tigers/p-ot-tp0-20061213-129751.html>

<http://osaka.nikkansports.com/f-ot-tp0-051216-0048.html>

<http://sankei.jp.msn.com/sports/baseball/080422/bbl0804221209000-n1.htm>

<http://sankei.jp.msn.com/sports/baseball/081202/bbl0812021955015-n1.htm>

<http://www.fighters.co.jp/news/detail/99.html>

http://www.giants.jp/G/gnews/news_391011.html

<http://www.nikkansports.com/baseball/news/p-bb-tp0-20081221-442396.html>

達成動機づけにおける「個人」と「社会」の調整と統合（伊藤）

<http://www.nikkansports.com/baseball/p-bb-tp0-20080113-306575.html>

<http://www.nikkansports.com/baseball/p-bb-tp0-20080117-308158.html>

http://www.npb.or.jp/CGI/teamnews/view_teamnews.cgi?id=129

http://www.npb.or.jp/CGI/teamnews/view_teamnews.cgi?id=2261

<http://www.softbankhawks.co.jp/news/detail/2908.html>

<http://www.sponichi.co.jp/osaka/spe1/200811/30/spe1217816.html>

<http://www.waterforum.jp/jpn/darvish/>

（いずれも 2009 年 10 月 6 日参照）

（心理学科 准教授）